

創建の精神も建物も、大阪市民の誇り
未来に伝えたい
チャーミングな公会堂

大阪市中央公会堂が開館百周年である。大正7(1918)年11月17日の開館日にあわせて、様々なイベントも計画されている。(本誌P13にイベント案内あり)

株式仲買人で北浜の風雲児と呼ばれた岩本栄之助が、建設に100万円(現在の50億円相当)を寄付した話や、ネオルネッサンス式の建築がコンペで選ばれたことはよく知られている。勝手連としておおさかKEYワードでは、「瀟湘八景」や「近江八景」になって、私なりの「大阪市中央公会堂八景」を選定してみたい。

第一景 蘭陵王の大舞台

約1,200席もある大集会室には、音楽会や演劇、講演会や演説、各種の式典開催など、ぶ厚い歴史があり、正面の大舞台上に、大阪で最も古い四天王寺の舞楽に由来した蘭陵王の舞楽面が飾られている。イケメシの蘭陵王は美貌が敵に侮られないよう、恐ろしい仮面姿で出陣して勝利した。その舞いが「蘭陵王」である。京都・先斗町の歌舞練場の屋根にも、蘭陵王は鬼瓦のように取り付けられ、芸事の神様のような存在である。

第二景 オケビと客席の秘密

地階に大集会室のオーケストラピットへの入口が残されている。“オケビ”である。大集会室の昔の客席も保存され、腰を乗せる座板の部分を跳ね上げると、裏に湾曲した金具が取り付けられているが、何の目的で取り付けられたのか? 答えは右の写真。

第三景 滯つくしのアラベスク

階段の手摺りは大阪市の市章・滯つくしを図案化して優美である。三階まで階段を昇るのはしんどいが、手摺りにつかまり階上から降りると、大正時代に迷い込んだ気がする。

第四景 踊る中集会室

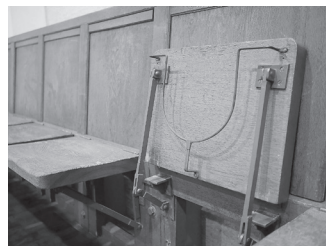
壮麗な柱に支えられた高い天井と、油彩やステンドグラスによる格調高い装飾に囲まれた三階の中集会室。社交ダンスの方がここを借りて踊っておられるのを見かけるが、映画『Shall we ダンス?』のような、時代を越えた楽しみがある。

第五景 ステンドグラスの光彩

特別室の天井画や壁画は、洋画家の松岡壽(1862~1944)が「日本書紀」をモチーフに描いたが、窓のステンドグラスも美しい。滯つくしと鳳凰のデザインに、朝や黄昏の光を通したガラスの輝きが奥深い。

第六景 地中杭、なんと4,000本

中之島は地盤が軟弱で、基礎の補強にたくさん杭が土中に打たれた。地下階に免震装置が並ぶ今の光景も壮観だが、公会堂を建設すべく、



地階に保存された大集会の椅子。帽子を掛けるのに便利な金具が座席の下についている。

百年前によくぞ打ち込んだ約4,000本の杭に圧倒される。杭の一本が地階に保存展示される。

第七景 フルーツ籠とシンポジウム

シンポジウムなどで用いられる小集会室は、昔は宴会などに用いられ、西側の天井には籠に盛られた薔薇の花とバナナ、いちご、洋梨などフルーツを図案化したステンドグラスがある。ここで熱い討議を聞きながら、天井を見あげると食欲が湧く。

第八景 ローマ福神と名市長

公会堂の外観をどこから眺めるのがよいか。梅檀木橋南詰めから見るライトアップされた夜景もよいが、東洋陶磁美術館前にある名市長・關一の銅像の背後に回って正面を見るのも、歴史の重みが伝わってよい。屋根に安置されたローマの福神メルクリウス(公会堂ではメルキュールと呼ぶ)とミネルヴァの銅像を見あげていると、市の発展と末永い繁栄を望んだ先人の思いが、ひしひしと感じられる。

以上「大阪市中央公会堂八景」の愚案だが、いや違いまっせ、緑色の屋根がかわいいとか、分離派風ともされる窓とカーテンが好きとか、レストランも入れましょとか、いろんなご意見もあるだろう。

市民それぞれ、気に入った公会堂のアングルが思い浮かぶはずだ。チャーミングな公会堂が、次の百年も市民の誇りとして伝えられるよう応援していきましょう。



図案化された「滯つくし」が美しい階段の手すり

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼霞堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像―』(創元社)など。